

出生前診断と向き合う

妊婦の血液検査で胎児のダウン症など3種類の染色体異常の可能性が分かる新しい「出生前診断」。日本産科婦人科学会は条件を定めた指針を3月までに示す予定だ。ただ、新たな検査は精度が高いものの非確定検査。確定診断にはおなかに針を刺す羊水検査が必要で、その点は従来の検査と本質的に変わらない。私たちは子どもを産む前の「診断」に、どう向き合えばよいのだろうか。これまでに出生前診断を受けた母親たちの体験や最前線の医師らの試みから探る。(平井敦子)

妊婦4カ月。膨らみ始めたおなかに長い針が刺さる。広島市の由貴子さん(35)は3年前、市内の

産婦人科で受けた羊水検査を思い出す。妊婦健診の超音波検査で、おなかの赤ちゃんにダウン症の可能性があると分かった。確定診断ができる羊水検査があると知らされ、医師から「検査すれば、産むか産まない

たダウン症の子を育てる若い母親のブログには、元気な表情の写真が並んでいた。育てられる気がした。「産むための腹をくくりたくて」。羊水検査を受けた。結果は陽性。赤ちゃんにダウン症があると分

くたさい」それから半年後、小春ちゃんが生まれた。今、1歳8カ月。検査後の医師の言葉の意味が、今なら分かる。笑っている顔も泣いている顔も寝ている顔も、とにかくかわい

い。穏子さん自身、長男一朗ちゃんが生まれたときは、ダウン症がどんな障害なのか知らなかった。「誰一人おめでどうと言ってくれず、ずっと泣いて。私の人生は終わったと思っただけでいい。でも、実際は違った。一朗ちゃんのおかげで、と、ゆっくり時間が流れる。「この子のペースに合わせて」と決めたときから、少しのことでもできるようになったことばかりがうれしくて」。気持ちも柔らかくなり、三つ上の長女へのまなざしも優しくしてくれ

「産みたい」正しい情報を

検査を受けて



小春ちゃんをたっこする由貴子さん (広島市)

「あんなに悩んだのがうそのよう。当時は障害のことを知らなくて。実際はちよつと手がかるくらいで、ちよつとならなかった」。由貴さんは娘をいとしそうに見つめる。

「ダウン症を等身大で知ると、検査後の選択が

■排除しないで

友人も増え、日々が豊かになったと実感している。ただ、一つ。先の不安がある。親が若い、死んでしまったら。「6歳の長女が大人になったとき、負担がかかり過ぎたらと思っ」。私自身

「将来気掛かり」考え悩む

いかなの選択を迫られま

かった。産む決意を医師に伝えると、こう言われた。

■準備する時間

「健康な赤ちゃんよりも大変なことも多いと思

います。大切に愛情をかけて育てれば、きっとそれ以上の喜びをもたらしてくれるはず。検査によって、出産までに親が準備する時間ができたと考え、少しずつ頑張っ

てきたんです」

「おなかの次男に障害は見つからず、昨年6月に出産した。穏さんはダウン症はその子の個性の一つ。排除すべきものではない」と力を込める。「ただ、子どもを産めない事情はいろいろある。考えた末に検査を受けることを、私は否定できないんです」

●新しい検査

妊婦の血液を採取し、胎児のDNAを調べる。流産の危険はない。検査時期は妊娠10週から。確定診断には羊水検査などが必要

●従来の検査

●羊水検査

妊婦のおなかに針を刺して羊水を取り、胎児の細胞を調べる。300人に1人に流産の危険がある。検査時期は妊娠15~17週。確定診断ができる

●母体血清マーカー検査

妊婦の血液を採取し、タンパク質を調べる。流産の危険はない。検査時期は妊娠15週から。確定診断には羊水検査などが必要

安心・安全